

和力 話力 輪力

第2回



駄洒落の効用

前群馬大学教授 高橋 俊三

冒頭から駄洒落——岩は、どのように落ちるか。岩は、ガンと落ちる。だから「岩」なのだ。石は、英語で落ちる。「石」だ。砂まじりの土は？「土砂」。こんな洒落を言うと、子どもたちは「駄洒落だ」「親父ギャグだ」と、囃し立てる。でも、結構楽しんでいる。

教師は、そうした彼らのお決まりの反応に臆せず、じゃんじゃん使いまわろう。洒落は、教室を明るくする。子どもたちの心を開放する。言語感覚を磨きもする。結構なものである。ただし、時に、駄作があったり、品格が落ちたりするから、注意。そう、洒落のうちで駄のものを駄洒落というのだ。

黙っていても始まらない。勇気を出して言うようにしよう。確かに、「沈黙は金なり」という格言があるけれど、「雄弁は銀なり」という文言と対になっているのだ。

話せば豊かに話せる人が黙ったとき、金になる。話す内容が無いから、また、話し方が分からないから、仕方なし黙っているというのでは、金にも銀にも銅にもならない。

もっとも、この格言には、別の解釈があるらしい。それは金より銀のほうが上だというのである。銀本位制度の時代は、流通価値として銀のほうが上位にあったのだそう。沈黙と雄弁が、一二位を分かち合うことになる。

さて、そうすると、三位になるのは何だろ

う。「言う」と「黙る」だから、三位は「聞く」かな、「傾聴」ということかなとも思われる。または、雄弁を論理的説得力だと捉えれば、三位は「温かく話す」かな、「愛語」ということかなとも思われる。「傾聴」も「愛語」も、教師にとって、重要な言語能力。どちらも三位の資格がありそうである。

雄弁と愛語の中にある沈黙だから、価値があるのだ。勇気を出して言葉を届けていこう。

ところで、洒落は一度しか使えない。同じことを二度言ったのでは、まさに駄目である。ただし二度言ってよい洒落が一つだけある。

授業中、子どもが発言を躊躇したとき、「勇気を出しなさい。勇気を出すと、言う気になります」と励ましてやる。そして、その言葉が忘れられないうちに、同じチャンスをつかえず子どもたちは、「マター」とか「マタカヨ」とか、反応するだろう。そうしたらしめたものだ。次のように返してやればよい。

「このことは二度言ってもいいのです。勇気の勇という漢字を書いてご覧。マタカでしよう。」——子どもたちはどよめく。

たかはし しゅんぞう 前群馬大学教授。ILEC言語教育文化研究所常務理事。NHKテレビ「話し方教室」「朗読入門」など企画出演。現在、「猫また」の45分授業で、小学生の笑いを呼ぶ授業に凝っている。